

教養の「没落」

——ムージルの「シユペングラ―・エッセイ」の余白に

大川 勇

—

人間の愚かさについて語ることには、つねにある種の困難がともなう。とりわけ自分以外の他者について、その愚かさを難じる時には。なぜなら、他者の愚かさについて語ろうとするとき、そこには暗黙の前提として、自分はしかし愚かではないという認識がふくまれているからである。オーストリア工芸協会の招きに応じて一九三七年三月におこなわれた講演「愚かさについて」のなかで、ムージル（一八八〇—一九四二）もまたこう言っている。

愚かさについて語ろうとする者、あるいは、得るところがあると思つてその種の会話に加わろうとする者は、だれしも自分が愚かではないことを前提としているにちがありません。ということとはつまり、自分で自分のことを賢いと思つているのをこれみよがしに見せつけているのです。そんなことをするのは、ふつう馬鹿

のしるしだといふのに。¹⁾

だが、そう言ったムージルが、自身その種の「愚かさ」をまぬがれていたかといえ、そうではない。彼もまた、その種の「馬鹿」と同様に、同時代の人びとの愚かさを非難せずにはいられなかつた。よく知られたところでは、シュペングラー（一八八〇—一九三六）の『西洋の没落』第一卷（一九一八）を批判したエッセイ「精神と経験」（一九二二）をあげることができるだろう。第一次大戦末期にあたる一九一八年の夏に、ヴィーンのブラウミューラー書店から自費出版のかたちで世に出たシュペングラーの書は、周知のように戦後またたくまに版を重ね、一九二二年にミュンヘンのC・H・ベック書店から出た第二巻とあわせて、一九三三年までに二十万部を売りつくすベストセラーになつたが、この時代の書の「愚かさ」を徹底して揶揄・嘲笑したのが、「西洋の没落をまぬがれた読者のための注釈」というイローニツシユな副題をもつエッセイ、「精神と経験」である。

その冒頭で「思考における文学的恣意は、いうまでもなくきわめて不快なものである」というシラーの言葉を引用したムージルは、はじめから情け容赦なくシュペングラーの思考における「文学的恣意」を指摘する。たとえば『西洋の没落』のなかの数学について論じた章で、シュペングラーが、あらゆる数学がいずれは到達していく数形象として、インドの十進法、ギリシア・ローマの円錐曲線・素数・正多面体のグループ、西洋の数体、多次元空間、変換理論および集合論のきわめて超越的な形象、非ユークリッド幾何学のグループ等々を列挙しているのをとらえて、ムージルは次のように言う。

この一節はいかにもそれらしく聞こえるので、数学者でない者がこれを読めば、すぐさま、こんな言い方が

できるのは数学者だけだと思ひこんでしまふだろう。しかし、じつは、シュペングラーがそこで高度の秩序をもつ数形象を数えあげるその専門家ふうのやり方はといへば、たとえていへば、動物学者が犬、テーブル、椅子、四次方程式を一緒くたにして四足類に分類するようなものなのである。¹⁾

若き日に工学系の教育を受け、哲学博士となるための学位論文審査でも副専攻として数学と物理学を選んだムールならではの鋭い切りこみであるが、ムールによれば、数学について論じるシュペングラーの杜撰さには目を覆いたくなるものがあり、単純な事実誤認だけでも、群論を関教論の拡張であると言ったり、群と集合をとりちがえたりするなど、枚挙にいとまがない。そしてそれは、たんに個々の知識レヴェルの誤りというよりは、シュペングラーの「思考のあり方」からくる問題であるという。というのも、シュペングラーの思考はあまりにも安易にアナロジーに寄りかかり、その結果、彼が数学について述べていることは、ほとんど次のような内容になつてしまっているからである。

レモンのように黄色い蝶がいて、レモンのように黄色い中国人がいる。だとすれば、ある意味でこう言うことができるだろう。蝶は中欧生まれの羽の生えた小型中国人である、と。²⁾

先に引用した「犬、テーブル、椅子、四次方程式を一緒くたにして四足類に分類する」動物学者のたとえと同様、シュペングラーの安易なアナロジー思考を揶揄するためにくりだされるなんとも強烈なアナロジーであるが、安

易なアナロジにたいしてより強烈なアナロジをもつてするこのシュペングラー批判の手法は、かなり有効に作用しているといえるだろう。シュペングラーのくわだてた壮大な「世界史の形態学」——『西洋の没落』の副題は「世界史の形態学概要」(Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte)と名づけられている——を正面から攻撃するのではない。シュペングラーが自分で、彼の「論証を裏つけてくれる唯一のもの」だと言っている¹⁾から数学に照準を合わせ、その知識と理解力がいかに生半可なものであるかを暴露することによって、該博な知識にささえられたシュペングラーの体系が砂上の楼閣でしかないことを、だれの目にもあきらかにするのである。このような批判の仕方は、おそらく講壇哲学者のなしうるところではない。諷刺の精神をたつぷりともちあわせたのちに「特性のない男」を書くにいたる作家ならではものだろう。

相手の半可通ぶりを痛烈にたたくこのような批判は、むしろその対象を数学についての論述にだけ限定しているのではない。物理学について考察するなかで、いっけん堅牢な客観的真理であるかに見える学説がいかに広い意味での文化に、せまい意味での研究者の個人的な嗜好に依存しているかをとくとと述べるシュペングラーにたいしても、ムージルは次のように言う。

そのようなシュペングラーの指摘は、いくつかの曖昧な点をのぞけば完全に正しい。誤っているのは、ただ、彼がそれを斬新な考えであると思っている点にある。そんなことは、ここ五十年の認識論上の知見についてなにほどかのことを知っている者には、周知の事実である。²⁾

学位論文『マッハ学説判定への奇与』(一九〇八)でマッハ哲学と格闘した経験をもつムージルにとつて、十九世

紀の力学的世界観を否定する経験批判論的知見は自明のものであったにちがいない。それをさも斬新で独創的な考えであるかのように語るシュペンゲラーにたいしては、ムージルはこのように高飛車な言い方でたしなめるだけである。しかしシュペンゲラーが、物理学の学説といえども文化や個人的嗜好に依存しているという事実の指摘を踏みこえ、だから物理学の諸体系に存在しているのは、絵画にさまざまな流派があるのとおなじように、さまざまな流派・伝統・手法・因襲なのだというとき、この乱暴な飛躍にたいしてムージルはひとこと、「これはまさにたわごとである」と言つて切りすてるのである。

だがムージルは、このような辛辣な言葉をあびせることによつてシュペンゲラー個人を攻撃しようとしたのではなかった。シュペンゲラー個人の「愚かさ」が、すくなくともそれだけが問題なのではない。このようないかげんな知識とずさんな類推にもとづいて壮大な駄弁を弄する本が、第一次大戦後のドイツ語圏で飛ぶように売れ、ひとりの似非哲学者を時代の寵児にしてみることが問題なのだ。後世のわたしたちは、それを第一次大戦敗北後のドイツ・オーストリアにおけるベシミスティックな時代の気分との関連で理解することができる。近代科学技術を駆使して人類初の総力戦をたたかつたあとのヨーロッパが物質的にも精神的にも疲弊し、とりわけ敗戦国となつたドイツ・オーストリアにおいて「没落」の気分が重くのしかかつていたとしても不思議ではないだろう、と。だが、シュペンゲラーとおなじ一八八〇年生まれの子孫にとつて、シュペンゲラーの流行はそのような時代の気分を反映したものとは映らなかつた。そうではなく、時代の愚かき、彼の生きる時代の愚かさを証しするものであつた。エッセイの第五節で、ムージルは言う。

シュペンゲラーを攻撃するということは、シュペンゲラーを生み、シュペンゲラーを好む時代を攻撃するこ

とである。というのも、シュペングラーの欠陥は、そのような時代の欠陥なのだから。⁹⁾

その「時代の欠陥」としてムージルが直接名指しするのは、シュペングラーがその典型であるような「浅薄さ」(Oberflächlichkeit)¹⁰⁾であるが、それはとりもなおさず、シュペングラーがその「世界史の形態学」において「ひとつの文化の不可避免的運命」として否定的に定位した「文明」の兆候でもあるだろう。

シュペングラーによれば、「文明」とは、完成段階にいたった「文化」が必然的に到らざるをえない崩落状態である。たとえば、ギリシア人が生みだした豊穡な文化がローマ人に受け継がれることによってきわめて無機的・人工的な文明へと凝固したように、人類の歴史に登場した文化はすべて、その発展の頂点で「魂」のない文明へと移行し、「没落」への道をたどる。文化から文明へのこの移行は、西洋においてはすでに十九世紀に完了し、以後ヨーロッパ人は真の芸術も哲学も喪失した、「魂」(Seele)のなく「知性」(Intellekt)の時代を生きている。「地方」(Provinz)の大地に根ざした「民族」(Volk)に代わって、「世界都市」(Weltstadt)に群をなして生息する「大衆」(Masse)が出現したのもそのあらわれであるが、即物的で実際的能力に長けたかれら大衆の「あらゆる伝承されたもの」にたいする無理解」「農民の賢さに優越する鋭くて冷たい知力」は、そしてまた、かれら大衆のもとめる「賃金闘争とスポーツ競技場のかたちをとって、こんにちふたたび出現した(パンとサーカス)」は、「文化」と「地方」が最終的に失われた終末の時代において「人間存在のまったく新たな形式、すなわち末期的で未来のない、しかしながら回避することのできない新たな形式」¹¹⁾が現れだたことを示している……。

一九一〇年代のヨーロッパにおける大衆社会状況を、このように「文化」から「文明」への世界史的移行の結

果としてとらえるシュペングラーにたいし、ムージルはエッセイ「精神と経験」のなかではつきりと異をとなえる。ムージルにしてみれば、シュペングラーのように「文化」と「文明」を画然と分ち、「文化」の側に「魂」「地方」「民族」等を配置したうえで、「知性」「世界都市」「大衆」としての「文明」を撃つというのは、なんとも不毛な議論でしかない。そこにおいて、同時代の非合理主義お得意の反知性・反理性・反悟性の題目があきもせず唱えられているからであるが、これについては、「人間はまさに知性であるのみならず、意志や感情、無意識(……)でもある。しかし、人間に、ただ理性が関与しないものだけを見ようとする者は、ついには蟻の国か蜂の国に理想を求めねばならなくなるだろう」と、皮肉のひとつも言っておけばよい。「文化」と「文明」のちがいにしても、どうしてもこの両者を区別したいというのであれば、「ただひとつのイデオロギーの支配下にあつて、まだ統一的な生の形式が保たれている」場合はこれを「文化」と呼び、「文明」については「拡散した文化の状態」と定義しておけばいいだろう。そうすれば、どの文明にもひとつの文化が先行することになつて、シュペングラーのいう「文化から文明への移行」という図式も成り立つことになる。だがその移行をもたらす原因は、シュペングラーがいうような「不可避的運命」などにあるではない。そのような神秘的要因によるのではなく、「それに関わっている人間の数の増大」というきわめて即物的な要因によるのである。

数億の人間に徹底させるのが、数十万の人間に徹底させるのとはまったく別の任務になることは明らかである。文明における否定的側面のほとんどは、社会のこの物体としての体積に見合うだけの伝導率を、もはやこの社会がもちあわせていないことに起因している。(……)数の増大に、精神の組織がついていけないの

だ。あらゆる文明現象の九八パーセントは、この点に原因をもとめることができる。¹⁵⁾

ムージルの考えでは、この「人間の数の増大」、それにとまなう社会的「伝導率」の低下の結果として、ヨーロッパはシュペンクラーの嘆く大衆社会への道をたどったのであり、その帰結が社会的症状としての「狭隘な良心あるいは強烈な浅薄さ」(impetuse Oberflächlichkeit)¹⁶⁾なのである。

エッセイ「精神と経験」において、「浅薄さ」という言葉は、こうしてふたたび重要な意味をおびて浮上してくる。一度目は、シュペンクラーに象徴される「時代の欠陥」をあらわすものとして、そして二度目には、シュペンクラーがいう「文明」の否定的側面をストレートに表現するものとして。だとすれば、ここでムージルは「浅薄さ」という言葉をたくみに使い、じゃっかん手のこんだやり方でシュペンクラーその人を(本人が言う意味での)「文明」の悪しき現象形態として否定的にえがいていると言えそうである。学問という「伝承されたもの」にたいする無理解¹⁷⁾を意に介そうともせず、その「鋭くて冷たい知力」で壮大な「世界史の形態学」を捏造し、その結果ベストセラーという「パンとサーカス」を提供するにいたったひとりの「大衆」として。右に引用した「精神と経験」の第十三節のなかには、シュペンクラーの「世界都市と地方」¹⁸⁾の対比を思わせる、「大都市と精神の闇に閉ざされた田舎 (schwarzgeistiges Land) とのちがひ」¹⁹⁾について述べたくだりもあるが、大都市と田舎(地方)の価値を転倒させるこの記述も、おそらくは、大都市を「文明」の所産とし、田舎を「文化」の故郷と見なしたシュペンクラーにたいする当てこすりであろう。トレルチ(一八六五—一九二三)は、『西洋の没落』²⁰⁾について、この書は——シュペンクラーの意に反して——いうところの「没落」にたいする「それ自身積極的な寄与」とな

るものであると言ったというが、ムージルにとつてもこの書『西洋の没落』は、シュベングラが否定的に述べた「文明」の産物でしかなかった。

このように、ムージルはシュベングラを否定する。だがそれは、あらためていうまでもなく、シュベングラが否定的に述べた「文明」をそのまま肯定することを意味するのではない。「文明における否定的側面」の存在はムージルにとつても自明のことであるが、文明とは、ムージルにとつてもともと「きわめて多くの知性を要求し、またそれを飲みこんでしまう」ような「社会的関係のきわめて複雑なシステム」なのである。この複雑なシステムに対応するためには、それに飲みこまれてしまわないだけの「知性」をもたなければならぬ。必要なのは、だから「精神の組織化のための政治学」(geistige Organisationspolitik)¹²¹なのだ、とムージルは言う。

この言葉はただちに、「特性のない男」(一九三〇—三二)においてウルリヒがその創設を要求した「厳密性と魂の地球事務局」(Erdensekretariat der Genauigkeit und Seele)を思いおこさせる。「オーストリアの理念」をさがしもとめる平行運動の場で、ウルリヒは「古い精神」にとつてかわる「より高貴な精神」を生みだすために、その事務局で「精神の総在庫調べ」をおこなうよう提案したのである。小説のなかでは、この提案はまともにとりあつてもらえず、アルンハイムの嘲笑の的となるだけでついに実現されることはない。現実世界において、ムージルはいかにしてこの「精神の組織化のための政治学」を確立しようというのか。

それが容易でないことを、ムージルはすぐに覚らねばならなかった。「精神と経験」から三年後の一九二四年、「精神と経験」エッセイを発表したのおなじ『ノイエ・メルクーア』誌に、ムージルは「劇場の〈没落〉」と題したエッセイを発表する。表題を見ただけですぐに『西洋の没落』を意識したとわかるこのエッセイで、ムージルは文化の解体に直面している時代の危機をふたたび取りあげているのだが、しかしそこで時代の危機は、「精神の組織化」の前提となる「精神」それ自体の危機であると告げられるのである。

シュベングラの記憶をいかにもつよく想起させる表題をもちながら、しかしエッセイ「劇場の〈没落〉」はシュベングラの思考を直接批判の対象とするものではない。ここで「没落」の主格となっているのは、もはや「西洋」ではなく、まずは「劇場」であり、さらには「教養」である。この、いわば第二の「シュベングラ・エッセイ」において、ムージルは、ヨーロッパの伝統的「道徳の施設」であつた劇場の「没落」に言寄せて、ヨーロッパの市民階級が十八世紀以来きずきあげてきた教養の「没落」について論じるのだ。

まずはじめに、演劇の「没落」から見ておこう。第一次大戦の敗戦から六年後の一九二四年当時、ヴィーンの劇場支配人たちのあいだでは「劇場の没落」という言葉がささやかれていた。フラン投機の失敗等の理由で経済状況が悪化した結果、「道徳の施設」であるとともに市民階級の「高級な文化財」でもあつた劇場が危機に陥つたのである。ムージルの見るところ、だが劇場は、経済危機が訪れる以前からすでに危機的状況にあつた。もともと宮廷のものであつた劇場は、市民階級によつて受け継がれたあともなお祝祭空間としての性格を保持していたが、高度資本主義の時代以降、劇場は社会的娯楽としての性格をいちじるしく強めていく。劇場に関心をもつ社

会層がひろがり、それがアモルフな構造をもつものへと拡散していくにつれて、劇場での公演は「義務であること」をもつぱらとする娯楽から、売り物であることをもつぱらとする娯楽へ」と変貌をとげ、こうして商業主義に傾斜していった劇場は、一九二〇年代の現代においてふたつの条件を同時に満たさなくてはならなくなった。すなわち、「可能なかぎりセンセーショナルであること」と「可能なかぎり親しみがもてること、つまり凡庸であること」である。この相反する条件が同時にもとめられることになる理由を、ムージルは次のように説明する。

ほんらい祝祭空間としてあつた劇場は、宗教的な厳肅さと結びついたある種の義務、もしくは強制をともなう娯楽であり、それゆえ退屈や倦怠を排除する仕組みを内包していた。ところが、商業主義への道をたどることによつてしだいに「純粋な娯楽」へと接近していった劇場は、その排除の仕組みを喪失し、それだけ「凡庸」なものになっていく。しかしそうやって「凡庸」なものになるにつれ、劇場の内部には退屈さがひろがっていき、その結果そこに今度は「気分転換への欲求」が生まれてくる。その欲求にこたえるのが「気晴らし」(Zerstreuung)としての「センセーショナルであること」なのだ……

純粋な娯楽として「凡庸であること」と、気晴らしとして「センセーショナルであること」——このふたつの条件を同時に劇場にもとめる観客とは、まさにシュペングレーが「文明」の時代の症候としてあげた、「パンとサーカス」をもとめる「大衆」のすがたそのものである。かれら「大衆」としての観客——ムージルはここでは「大衆」という言葉を使つてはいないが——の要求にこたえようとして、劇場は、一方ではますます平板で口あたりのいいもの(「凡庸」)になっていき、また一方ではますます騒がしく絶叫するもの(「センセーショナル」)になっていく。その結果、いまや劇場で成功するために必要なのは、「表面的な(oberflächlich)ヴァリエーション

の豊かさ」と「深層における不毛さ」というありさまである。このような状況下、劇作家も批評家もなすべを知らない。というか、かれら自身がいつのまにか、「大衆」に受けいれられる水準の仕事しかしなくなっている。こんにちでは、

有能な劇作家の仕事ぶりはといえは、労働時間の最初の三分の一と終業まぎわに事故の数が最小になることを心得ている工場管理技師のようだ。集中力には波があるので、劇中に三つの山をもってくるほうが一つの水準をたもつよりも受けがいいということを、彼は本能的に察知している。理念など、問題にもならない。

(傍点筆者)

「理念」など問題にしようとしてもしないこうした劇作家の手法に、ムージルは「ジャーナリストの文体との類似」を見る。そして、にもかかわらずそのような「工場での経験」にもとづく劇作法を斬新な手法だともちあげる批評家しかいない状況に、嘆きの声を発するのである。「ある劇作品の精神的意義についての論究、その作品がもつ思想や情熱、それどころか雰囲気についての議論すら、ここではごくまれにしか出会わない」(傍点筆者)と。ドイツ演劇の世界にいま決定的に欠けているのは、「精神的秩序をもとめるための意志と能力」なのである。

まさに「劇場の〈没落〉」といっているこのような状況は、ではどこから生じたのであろうか。ムージルによれば、劇場という商業化された「娯楽の危機」(Krisis des Vergnügens)は、「教養の危機」(Bildungskrisis)にほかならない。というのも、劇場は、「教養の娯楽」(Bildungsvergnügen)と言われていることからわかるように、

「教養」と「娯楽」というふたつの要素から成り立つ文化財だからである。

こんにちの劇場が露呈しているさまざまな事態は、広範な教養の危機のごく一部をしめすものでしかない。あるいは、そう言いたければ、わたしたちが体験している教養の黄昏のごく一部をしめすものでしか。(傍点筆者)

かくして、エッセイ「劇場の〈没落〉」はその内実を「教養の〈没落〉」と呼びうるものに変え、以下順次「教養の黄昏」とムージルがいう時代状況をえがきだしていく。

たとえば新聞を見るがいい。新聞は読者に一定の知的能力を要求するが、センセーションを追いもとめることを旨とする新聞が読者に期待する理想的能力とは、「自分たちの報道をなんとか理解することができるだけの最小の頭脳」である。そこに「精神的業績についてのすばやく適切な理解」など望むべくもなく、あるのはただ、巨大化した社会に流通可能な刺激としての「英雄崇拜・残虐行為・感傷・偏狭・金銭欲・流行・享楽欲・好奇心」といった大衆の欲求 (Massenbedürfnis) だけだ。

あるいはまた、学校教育に目をむけてみよう。いまや教育の現場では、これまでの「悟性にもとづく干からびた授業」に「(心の教育) という理想」が対置されている。「判断力を研ぎますことに代えて(直観) が、語ることに代えて(体験) が、概念化する規定に代えて写真が」、それぞれ望ましいものとして求められているのである。おなじような風潮は芸術の領域にも見られ、印象主義の主張するところによれば、詩人は「心臓もしくはそ

れに相似た、人間の大腦とは無關係の器官」にむかつて語りかけねばならないのだという。

このようにして知性と悟性をしりぞける、「いわゆる主知主義への敵対」と総称しうるような風潮が社会を覆い、ほほすべての文化領域が機能不全に陥っているとすれば、「劇場の〈没落〉」はもはや劇場の内都だけで解決できる問題ではないだろう。劇場の雰囲気支配している「倦怠、意気阻喪、無関心」は、「大衆の欲求」を刺激する新聞や、「心の教育」をとなえる学校や、「大腦」とのかかわりを拒否する印象主義の文学等によって醸じだされる「教養と文化の倦怠、不確實、精神の衰弱」と通底し、そこに「息をのむような非精神性」(die atemraubende Ungeistigkeit)を生じさせた。ほかならぬその点に、ムージルは「教養の危機」「教養の黄昏」を見るのである。

だが、とりわけ劇場は、そのような「教養の危機」が尖鋭化した場となっている。というのも、先に見た、理念など問題にしようともしない「劇文学のはなはだしい非知性ぶり」は、「反文学」の立場を鮮明にする演劇人によって、あからさまに「教養への嫌悪」の感情とむすびつけられ、ここでは「教養という厄介物からの劇場の解放」が声高に唱えられているからである。教養からの解放を叫ぶかれらが、では劇場にどんな新風を吹きこもうとしているのかといえは、即興と俳優中心の演劇という純粹なお祭り騒ぎの復活であつて、それはムージルの目には「作家の文学を、俳優たちがまいにち新聞で読んでいるジャーナリストの文学と取り替える」ことにしか映らない。にもかかわらず、劇場にたずさわるほとんどの詩人が、みずからこの演劇の「ジャーナリズム化」に加担した。かれらは才能あるジャーナリストとなつて、作品を手際よくまとめ、効果的に盛りあげ、観客を刺激し、流行にのる能力をいかになく發揮したが、そうやってたえず新しいものを求めるかれらが見いだすものはいえ

ば、ただ「最新のもの」でしかなかった。その結果として生じるのは、次のような事態である。

精神の大氣中をただようもろもろの刺激はすべて、ばらばらに揺さぶられるばかりで、そのうちのどれひとつとして深められ、成熟へといたることはない。⁽³⁾

自らの手で教養を追放した劇場がさらすにいたった、これがその無惨なすがたである。

三

十八世紀以来「教養の娯楽」としてヨーロッパ市民社会の文化の頂点に君臨してきた劇場は、こうしてジャーナリストと化した詩人の手にみちびかれて自己崩壊への道をたどるが、それは同時に「教養」の崩壊であり、これまで教養をささえてきた「精神」の崩壊でもあった。言葉を換えれば、劇場がそのような「精神」の崩壊を象徴するものであるからこそ、ムージルは——かつて「精神と経験」エッセイでシユペングレーを時代の典型として攻撃したように——劇場の現在を批判するのである。劇場の、そして時代の「息をのむような非精神性」を批判するムージルの言葉はいかにも辛辣ではあるが、しかし、ではこの事態を打開するために何をすればいいかと自問するとき、彼にもその答えは容易には見つからない。「精神と経験」エッセイで掲げた「精神の組織化のための政治学」を主張しようにも、組織化すべきその「精神」がほとんど死に瀕しているからである。

教養が光りかがやいていた啓蒙の十八世紀に回帰すればいいのだろうか。そうではあるまい。たとえば、ヘルダー（二七四四—一八〇三）が教養の規範とした「普遍的な人間の叡知という古典古代の理想」を現代に甦らせることが可能かどうか、考えてみよう。たしかに、どんな教養理念のなかにも、その時代時代の相対的理想を越えた「普遍としての人間的価値」がふくまれているが、一方でそれぞれの教養理念はさげがたく、それをになう階層の思惑に規定されている。ヘルダーの「教養人」（ein gebildeter Mensch）が理想とする「洗練された立派なよき趣味と、みごとに完成された言葉づかいという永遠の規範」（ヘルダー『美しい学問とギムナージウム教育の真の概念について』一七八八年、より）にしても、その規範は、勃興期にあった市民階級が「社会的上昇をなしとげるための論拠」³⁹として世俗的に機能しなかったわけではない。しかも、この啓蒙の遺産としての教養は、現代の大衆社会状況がもたらした「人間の数の日々の増加」⁴⁰という事態に対処するには、あまりにも時代遅れであり、ムージルの見るところ、もはや時代のスピードについていけないのである。

では、この時代にあわせて、教養にあらたな内容をもりこめばいいのだろうか。その試みはすでにおこなわれている。現代の教養は、内容的にはもっぱら実証的認識、事実、知識、専門的思考法の方向へとむかい、「実用の世界支配」の様相すら見せているし、学校教育の場でも「現実的傾向」をとりいれようとする試みがあった。しかし、その結果はといえは、さまざまな実際の知識や認識がばらばらに並存するだけであり、また学校においても、人文主義的教育が実科教育によって駆逐されるということではなかった。いくら教養にあたらしい内容を注入しても、それを受けとめるだけの教養理念がなければ、そこに「あたらしい精神」⁴¹が生まれることはないのである。

では、どうするか。ムージルが最後に残した言葉は「わたしにはわからない」であつた。この途方にくれた言葉とともに、エッセイ「劇場の〈没落〉」は、教養が没落し、精神を喪失した時代への苛烈な批判だけを残しておわるのだが、しかしムージルは、この問題をなおも諦めることなく追究し、それから六年後に公刊した『特性のない男』第一巻（一九三〇）において、「厳密性と魂の地球事務局」の創設をウルリヒに要求させるのである。エッセイ「精神と経験」で提示された「精神の組織化のための政治学」の問題が作家ムージルにとってきわめて重要なものであつたことを裏書きする事実であるが、本稿第一節の末尾で述べたように、だがその要求もまた現実化への希望もあたえられないまま消え去っていくのを見ると、わたしは無謀にも、この問題にとりくんだムージルの意思を現代において引き継がねばならないという思いにかられる。なぜなら——本稿で暗黙のうちに示唆しつづけたように——教養の「没落」というムージルの時代の問題は、現代のわたしたちの問題でもあるから。ムージルの解けなかつた問題は、その後八十年ちかいつをへだてた現代においてもまだ解けていないだけでなく、ますます焦眉の問題となつていふと思われるからである。

ムージルの意思を引き継いでこの問題を考えていくための手がかりを、彼はふたつの「シュベングラール・エッセイ」のなかに書きのこしてくれている。その第一は、現代文明の危機を招来したのは「人間の数の増大」という大衆社会状況であるが、それを「教養の危機」にまで導いたのは、ほんらい教養人であるべき詩人や批評家だということである。生半可な知識をふりまわして「西洋の没落」を説いたシュベングラールもふくめて、現代における知識人は精神を喪失した「大衆」ではないかというその考えは、『特性のない男』第一巻とおなじ一九三〇年に刊行された『大衆の反逆』でオルテガ（一八八三—一九五五）がおこなう、「大衆」の典型としての「専門家」

批判につながっていく視点を先取りしている。

第二には、本稿ではふれなかったが、「劇場の〈没落〉」を語るムージルが、劇場における「精神の貧困」はなにも二十世紀になってとつぜん出現した現象ではなく、ゲテ時代にも存在した「愚直で民衆的な特徴」⁽¹⁾を大都市風に拡大し、尖鋭化したものだと言っていることである。教養がもつとも光りかがやいていたはずの啓蒙の十八世紀に、すでに教養の危機の萌芽が見られるというその考えは、教養とそれに関与する「人間の数の増大」の問題、すなわち啓蒙のはらむ「大衆」の問題をあらためて浮き彫りにすると同時に、その問題をするどくえぐつたヴィーラント（一七三三—一八一三）の小説『アプデラの人びと』（二七七四）の存在を想起させる。

ここではオルテガとヴィーラントというふたりの名前を出したが、両者をむすぶ線上に浮上してくるのは、〈大衆〉と〈教養〉の問題であり、わたしはこの問題を、主としてドイツとオーストリアを中心とする中欧精神史の枠組みのなかで探つていこうと思う。〈教養〉はなぜ「没落」したのか、それは〈大衆〉の出現とどのような関係にあるのか、〈大衆〉としての知識人はいつ・どのようにして生まれてくるのか、それははたしてムージルのいう「人間の数の増大」と関係があるのか……といった問いを内にかかえて、これからわたしは教養理念の誕生する十八世紀にまでさかのぼり、ヴィーラントを起点に以下順次、フンボルト、シュティフター、ブルクハルト、ニーチエ、ジンメル、M・ウエーバー、トレルチ、シエラー、マンハイム、ムージル、H・プロツホ、カネットイを主要な中継地とする、教養の精神史をたどるつもりである。それは、ムージルの断念した問題への答えをもとめる試みであると同時に、おそらくは、ありえたかもしれぬもうひとつの教養のすがたをもとめる探索ともなるであろう。

〔付記〕本稿は、「知のかげり・教養のゆくえ」という仮想の表題のもと、今後書き継がれることになる論考の序章である。

註

- (1) Musil, Robert: Über die Dummheit. Vortrag auf Einladung des österreichischen Werkbunds gehalten in Wien am 11. und wiederholt am 17. März 1937. In: Gesammelte Werke. Bd.2: Prosa und Stück/kleine Prosa, Aphorismen/Autobiographisches/Essays und Reden/Kritik. Hrsg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1978, S.1273. (邦訳「愚かちについて」水藤龍彦訳、『ムージル著作集』第九卷所収、松籟社、一九九七年)
- (2) 早坂七緒『西洋の没落』とムージル、『ドイツ文学における〈ユートピア的なもの〉の位相』所収、昭和六十三年度文部省科学研究費補助金(総合研究A)研究成果報告書、一九八九年、六三頁。
- (3) Musil, Robert: Geist und Erfahrung. Anmerkungen für Leser, welche dem Untergang des Abendlandes entronnen sind. In: Gesammelte Werke. Bd.2, S.1042. (邦訳「精神と経験——西洋の没落を逃れた読者のための覚書」水藤龍彦訳、『ムージル著作集』第九卷所収、松籟社、一九九七年)
- (4) a.a.O., S.1043.
- (5) a.a.O., S.1044.
- (6) a.a.O.
- (7) a.a.O., S.1045.
- (8) a.a.O.

- (9) a.a.O., S.1048.
- (10) a.a.O., S.1058.
- (11) Spengler, Oswald: Der Untergang des Abendlandes. Umriss einer Morphologie der Weltgeschichte. München 1972 (dtw838), S.43. (邦訳『西洋の没落』全三巻、村松正俊訳、五月書房、一九八四—八七年)
- (12) a.a.O., S.46.
- (13) Musil: Geist und Erfahrung, S.1057.
- (14) a.a.O.
- (15) a.a.O., S.1057f.
- (16) a.a.O., S.1058.
- (17) 直接引用した箇所にかんじていえば、テキストに登場する順番はじつは逆で、エッセイの第十三節で、シュベングラーがいう「文明」の否定的側面をあらわすものとしての「狭隘な良心あるいは強烈な浅薄さ」という言葉が、つづく第十四節で、シュベングラーに象徴される「時代の欠陥」をあらわすものとしての「浅薄さ」という言葉が出てくる。ただし、後者は第五節で「私はシュベングラーを攻撃する。彼が典型的であるから。彼が浅薄であるから」と言ったこととの復唱もしくは再説である。
- (18) Spengler, a.a.O., S.44.
- (19) Musil: Geist und Erfahrung, S.1058.
- (20) Lübke, Hermann: Historisch-politische Exkaltationen. Spengler wiedergelesen. In: Spengler heute. Sechs Essays mit einem Vorwort von Hermann Lübke. Hrsg. von Peter Christian Ludz. München 1980, S.7.

- (21) Musil: Geist und Erfahrung, S.1057.
- (22) a.a.O., S.1058.
- (23) Musil, Robert: Der Mann ohne Eigenschaften. In: Gesammelte Werke. Bd.1. Hrg. von Adolf Frisé. Reinbek bei Hamburg 1978, S.596f. (邦訳『特性のなぐ男』加藤二郎訳『トモジル著作集』第一—六卷所収、松籟社、一九九二—一九五年)
- (24) Musil, Robert: Der „Untergang“ des Theaters. In: Gesammelte Werke. Bd.2, S.1116. (邦訳「演劇の「没落」」田島範男・長谷川淳基訳『トモジル著作集』第九卷所収、松籟社、一九九七年)
- (25) a.a.O.
- (26) a.a.O., S.1118.
- (27) a.a.O., S.118f.
- (28) a.a.O., S.1119.
- (29) a.a.O., S.1120.
- (30) a.a.O., S.1120f.
- (31) a.a.O., S.1117.
- (32) a.a.O., S.1122.
- (33) a.a.O., S.1125.
- (34) a.a.O., S.1126.
- (35) a.a.O., S.1129.

- (36) a.a.O., S.1126.
- (37) a.a.O., S.1128.
- (38) a.a.O.
- (39) a.a.O., S.1123f.
- (40) a.a.O., S.1125.
- (41) a.a.O., S.1125f.
- (42) a.a.O., S.1131.
- (43) a.a.O., S.1122.